

# 第21回 四條大宮の東南地域

## ■ 来迎堂町の名のいわれ

今回は、本シリーズ第20回の地域の北側をめぐることにしましょう。ここは、第2回で紹介した地域の西側でもあります。まず、堀川警察署の前を北へ、松原通を渡ったところ。堀川通の西側歩道の植え込みの中に、北来地蔵菩薩（下京区堀川通松原上ル来迎堂町）の小祠があります。

京都市による、簡潔かつ要をえた駒札が立っていますので、引用します。

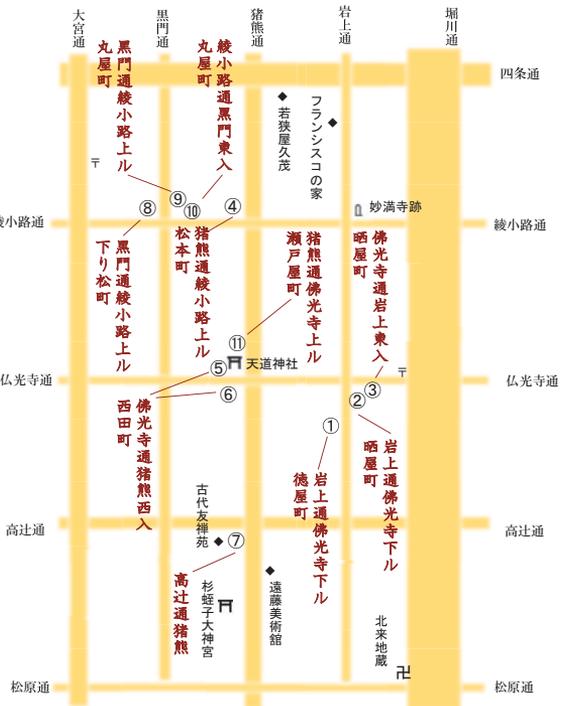
北来地蔵菩薩

ここには、松原通堀川西入の北門前町及び来迎堂町の地蔵菩薩像二体が祀られている。

北門前町は、松原通の南の町内で、町名は日蓮宗の大本山本圀寺の北門前に位置することに由来する。また、来迎堂町は、松原通の北の町内で、町名は天仁二年（一一〇九）にこの地に創建された寺院である来迎堂に由来する。

両町とも、天明八年（一七八八）の大火で罹災したが、その後、町内の人々の深い地蔵信仰に支えられてつくられたのが、この地蔵菩薩像であるといわれている。

町名看板の所在（四條大宮の東南地域）



これらの地蔵菩薩像は、近年町内の古老の家で祀られていたが、堀川通の暗渠整備に伴い、町内の人々によって地蔵堂が建設され、ここに安置された。

地蔵菩薩像は、北門前町が立像、来迎堂町が坐像であるが、いずれも江戸時代につくられた木彫の貴重なものである。

なお、北来の名称は、北門前町と来迎堂町の頭文字をとったもので昭和十五年（一九四〇）より一般にこのよ



北来地藏菩薩



駒札

うに呼ばれている。

駒札によれば、来迎堂町の由来は「天仁二年（一一〇九）にこの地に創建された寺院である来迎堂に由来する」とあります。この来迎堂は移転して、今は来迎堂新善光寺（下京区富小路五条下ル）と呼ばれています（本シリーズの第12回参照）。駒札の記載を、古典籍によつて確かめてみましょう。

『山城名勝志』巻之五の「来迎堂」の項には、

来迎堂 元在三五條堀川ノ西北側、来迎堂ノ町今遷<sup>ニ</sup>富ノ小路六條ノ坊門ノ南<sup>ニ</sup> ○本尊模<sup>ニ</sup>信州善光寺ノ像、故號<sup>ニ</sup>新善光寺、

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年（一七〇五）  
『改定史籍集覽』二二卷、近藤瓶城編、臨川書店、一九八四

新加通記類第一八

（書き下し文）

来迎堂（元は、五條堀川の西北側、来迎堂の町に在り。今は、富の小路六條の坊門の南に遷る。○本尊は、信州善光寺の像を模す。故に、新善光寺と號す。）

と記載されています。この一文の五条通は今の松原通のこと、六条坊門は今の五条通のこと。当時（一七〇五年頃）は、松原通の名前がすであつたはずですが（『都名所図会』（一七八〇）では松原通の名称を使っています）、『山城名勝志』では松原通を正式名の五条通と書いています。さらに、永禄十二年（一五六九）八月九日付の古文書を引いて、「新善光寺<sup>号</sup>来迎堂領として、洛中高辻堀川と五条の間に敷地四町などがあつた」ことが述べられています。

『山城名跡巡行志』第一の「来迎堂」の記載を次に示します。ここには、「鳥羽院が天仁二年（一一〇九）に建立した」という記載があります。

来迎堂<sup>號<sup>ニ</sup>新善光寺<sup>一</sup></sup>、在<sup>リ</sup>富小路<sup>云<sup>ニ</sup>下<sup>一</sup></sup>六條坊門<sup>ノ南<sup>ニ</sup></sup>。宗旨同<sup>ニ</sup>。門堂<sup>西<sup>ニ</sup></sup>。本尊、善光寺模<sup>ス</sup>形<sup>ヲ</sup>緣起<sup>ノ</sup>。鳥羽院、天仁二年建立<sup>ス</sup>。舊<sup>クハ</sup>在<sup>リ</sup>五條堀川<sup>云<sup>ニ</sup>西<sup>一</sup></sup>堂<sup>ト</sup>。来迎。

『山城名跡巡行志』、僧淨慧、宝曆四年（一七五四年）  
『新修京都叢書第十卷 山城名跡巡行志・京町鑑』光彩社、一九六八  
（書き下し文）

来迎堂（新善光寺と號す）、富小路（下寺町と云ふ）六條坊門の南に在り。宗旨は同じ（浄土宗）。門堂は西向。

本尊は善光寺に形を模す（縁起、之を略す）。鳥羽院、天仁二年に建立す。舊くは五條堀川の西（來迎堂町）に在り。

これらの古典籍の記述は、來迎堂町を含む一角に、元の來迎堂が建っていたことを示しています。來迎堂が下寺町に移ったのは、豊臣秀吉の京都改造の時（天正一九年（一五九二））です（本シリーズの第12回参照）、すでに四百年以上前のことによる町名です。

### ■ 西堀川通・東堀川通は消えた

駒札には、「堀川通の暗渠整備に伴い」とあり、さらに「昭和十五年より」という文言があります。これらの文言はごくさりげなく書かれています。北来地藏菩薩をこのような形で祭らざるをえなかった、深い事情（太平洋戦争時の強制疎開）が隠されています。このあたりの変化を、堀川に沿った西堀川通と東堀川通（どちらもこのあたりには、今はありません）に注目して、時代を追って調べてゆくことにしましょう。

まず、日文研のサイト

<http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/images/26.html>

から、(イ)『改正新板京都区組明細図』（明治一八年（一八八五）の一部を切り取って引用しましょう。堀川の東には東堀川通、西には西堀川通が描かれています。西堀川通は、松原通を越えて南下し、本圀寺の東門（堀川警察署の南、題目碑のあるところ、本

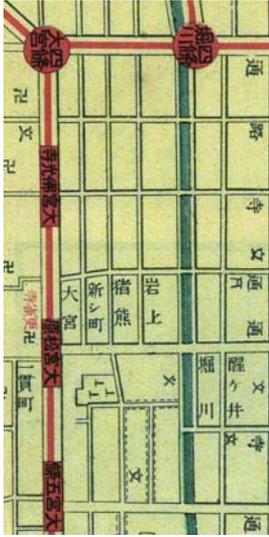
シリーズの第20回参照）の前で突き当たって、東に折れて、橋を渡り東堀川通と合流します。なお、この図で、堀川から分かれた四条川の流路が四条通沿いに示されています。また、松原通の少し北にも西に延びる分流があります。これらの水路は、いまは埋め立てられて消滅しています。

一緒に並べた(ロ)『最新京都市街地図いろは引早わかり』は大正一三年（一九二四）の地図です。堀川警察署の表示があるので、西堀川通について、より正確な情報がえられます。(イ)と同様に、本圀寺の東門のところ（堀川警察署の東南側）で突き当たっていることが確かめられます。鉤形に曲がった所で堀川を渡る橋があります。

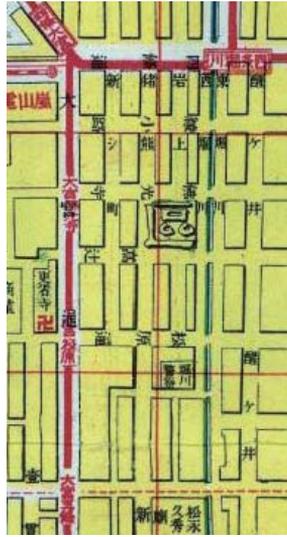
ところが、同じ大正一三年（一九二四）に発行された(ハ)『実地踏測京都市街全図』では、西堀川通は五条通まで通じていることが示されています。多分(ロ)の地図は、改訂が間に合わなかったのでしょうか。(ロ)と(ハ)を比較すると、堀川を渡る橋が万寿寺通の延長上に付け替えられていることがわかります。(ハ)でわかるように、五条から南は西堀川通はありません。また、東堀川通は万寿寺通で行き止まりになっていることがわかります(地図(ロ)では、五条まで道があるようにも解釈できますが、(イ)と(ハ)にないので、多分誤記だと推測できます)。これらを総合すると、すくなくとも大正一二年（一九二三）頃には、西堀川通が五条通まで通じたといえます。

このあたりは、太平洋戦争のときに、大きく変化しました。それは、いわゆる「強制疎開」がおこなわれたからです。戦時とはいえ、法治国家も何もあつたものではありません。この強制疎

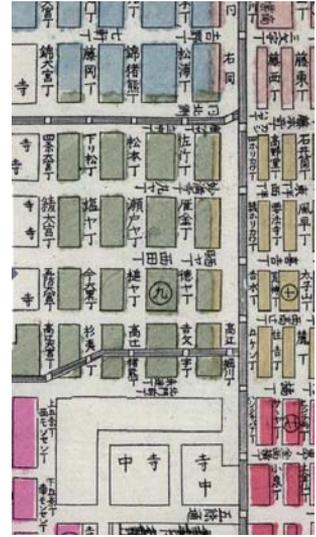
一部を切り取り加工)  
 (国際日本文化センター「地図データベース」より、



(ハ)『実地踏測京都市街全図』(1924年)の来迎町付近



(ロ)『最新京都市街地図いろいろ引早わかり』(1924年)の来迎町付近



(イ)『改正新板京都市組明細図』(1885年)の来迎町付近

開は敗戦直前(昭和二〇年(一九四五))におこなわれたのですが、北来地蔵として昭和十五年(一九四〇)に祭られた祠(駒札の「昭和十五年」の文言からの推測)がこのときに撤去を余儀なくされて、駒札に「近年町内の古老の家で祀られていたが」とあるように、個人宅に保管されるようになったと推測されます。

敗戦直後(昭和二十一年(一九四六))の生々しい航空写真(写真名 USA-R275-A-7-132)が、国土地理院の国土変遷アーカイブ(空中写真閲覧 <http://archive.gsi.go.jp/airphoto/>)で閲覧することができ、東堀川通東側の被害が甚大ですが、西堀川通の西側にも強制疎開の跡がはつきりとわかります。特徴的なのは、西堀川通に面した堀川警察署の車寄せにいたるアプローチの跡(半円形)で、これを目印にすると、半円形をほぼ含む線まで強制疎開がおこなわれていることがわかります。半円形アプローチは削られました、現在の堀川警察署の正面の緑地帯として、申し訳程度に残っています。この半円形の緑地帯は、「強制疎開のときに残った」として記念碑でも建てて残しておくべきでしょう。

このあたりの強制疎開の範囲を図で示しておきましょう。この図は、現在の地図に、敗戦直後(昭和二十二年(一九四六))の航空写真(写真名 USA-R275-A-7-132)による情報を書き加えたものです。強制疎開の範囲を赤いハッチングで示しておきました。目印の堀川警察署前のアプローチの跡(半円形)も手書きで書き込んでおきました。図にすると、「強制疎開による破壊がいかに広範囲であったか」をあらためて実感できますね。

強制疎開のあとは、元に戻されることはなく、現在とほぼ同じ道幅の堀川通として整備されました。昭和三六年(一九六一)の

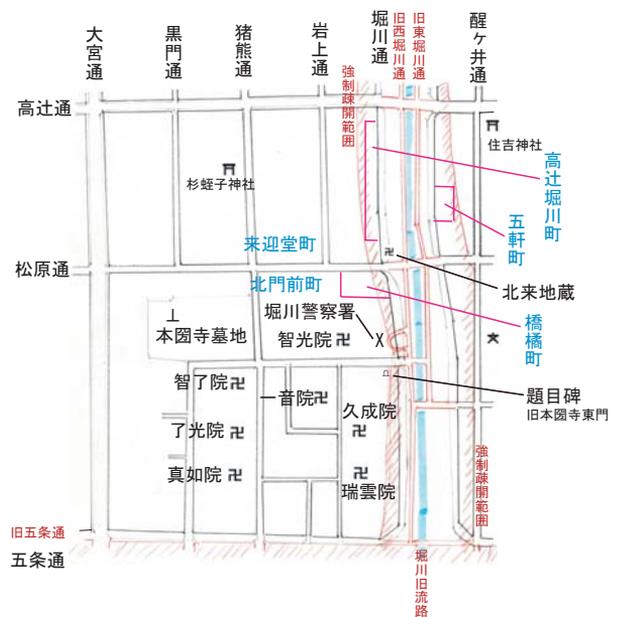
航空写真（写真名 MKK614-C6-6944）では、すでに西堀川通を吸収した形で、堀川通が開通していることがわかります。堀川は開渠のまま残っています。この時点でも、堀川警察署の半円形アプローチが、新しい堀川通の道路脇に残っていることがわかります。堀川通の整備は、来たるべきモータリゼーションを先読みした決定だったとおもいますが、強制疎開させられた住民の側はたまったものではなかったでしょうね。そして現在は、ゆきすぎたモータリゼーションの結果、生活の質が次第に下がりつつあります。

堀川は、昭和三八年（一九六三）に第二疎水分線と小川こがわからの



堀川警察署前に残った半円形アプローチ

### 堀川通の高辻〜五条間の強制疎開（概要）



導水が廃止されたのにもなつて、三面コンクリート化と暗渠化がおこなわれました。このあたりも、堀川の暗渠化によって、またまた変化します。駒札にもあるように、このときに、現在の北来地藏堂が建てられました。昭和四四年（一九六九）の航空写真（写真名 MKK693X-C5-29）では、すでに暗渠になっていています（工事中かもしれない。要調査）。現在の航空写真は、インターネットの地図サービスや Google Earth で閲覧することができます。

現在の堀川通は、片道四車線の幹線道路。ほんとうに片道四車線も必要なのだろうか？ 少なくとも堀川の御池〜五条間が開渠のまま残っていれば、都市の中の貴重な水辺として市民の憩いの場所になった可能性があります。

### ■ 強制疎開に生き残った町名

堀川松原西南角の建物（セブンイレブンが入っている）の町名は、はしたちまちやう橋橋町。この一軒のビルだけが橋橋町で、すぐ南は堀川警察署で柿本町、すぐ西は北門前町。江戸時代は東堀川之分として花橋町と橋本町、西堀川之分として西橋本町があると記載されています（『京町鑑』縦町）。「明治元年（一八六八）」に此の三町を合わせて、橋橋町とした」と『坊目誌』に載っています（上記部分図（イ）に「ハシタチバナ丁」として示されています）。この時点で、橋橋町は堀川小路（東・西堀川通）の両側町とみなすこともできませんが、大部分は東堀川通の片側町です。堀川通が拡幅されたため、橋橋町の大部分（東堀川町に西面する地域、江戸時代の花橋町と橋本町）は堀川通に含まれて消滅してしまい、わずかにセブンイレブンのある一角（西堀川通に東面する地域、江戸時代の西橋本町）だけが残ってしまったわけです。その北の高辻堀川町（上記部分図（イ）に「高辻堀川丁」として示されています）は、西堀川通の片側町ですが、大部分が消滅し、西側の部分だけが残っています。一方、東堀川通の片側町の五軒町（上記部分図（イ）に「五ケン丁」として示されています）も、高辻通から松原に至る大部分が消滅し、わずかに中央部東側部分が残って

います。お上の立場としては、こんな場合には「他の町に合併してしまえ」となりがちですが、橋橋町や五軒町の町名を残して、存在した痕跡を消さずにおくというのは、なかなかしぶといえます。「強制疎開」を忘れないためのよすがとして象徴的な意味があるので、今後ともこれらの町名を残しておいてほしいものです。

「強制疎開」の実際については、最近出版された『戦争のなかの京都』（中西宏次著、岩波ジュニア新書、二〇〇九）に詳しいので、ぜひともご覧ください。

### ■ 妙満寺跡

堀川通の一筋西は、岩上通。この通りを、岩上松原の交差点から北上しましょう。高辻通を越えて、仏光寺通に辿りつく少し手前に、町名看板「岩上通佛光寺下ル徳屋町」①が掲げられています。徳屋町は、岩上通沿いの両側町（縦町）です。これは、上記部分図（イ）でもわかります。

さらに北上しますと、岩上通と仏光寺通の四つ辻の東南のお宅、二枚の町名看板が直角に貼ってあります。一枚は、「岩上通佛光寺下ル晒屋町」②で、もう一枚は、「佛光寺通岩上西入晒屋町」③です。どちらも町名は、晒屋町。晒屋町は、仏光寺通の両側町（横町）です。これは、上記部分図（イ）でもわかります。

岩上通をさらに北上して、岩上通綾小路の十字路の東北角、岩上通に面したところに、「妙満寺跡 二十六聖人発祥之地」の碑

が建っています。建立は比較的新しく、「一九七九年七月」の日付。記念碑の年号は和暦で書かれることが多いので、「昭和五四年七月」とするのが普通。西暦で書かれているのに興味を引かれました。建立者は「茨木」とあります。インターネットで検索すると、イエスズ会神父茨木晃（スペイン生まれ。一九六七年に日本に帰化）らしいことがわかりました。これで納得。一昔まえならどうしようもなかった事柄でも、インターネット検索でヒットするのはおどろきですね。

妙満寺は、日蓮宗二一本山の一つ。もともと永徳三年（一三八三）に室町六条坊門に建立されました。天文法華の乱で一時京都を離れたあと、天文七年（一五三八）に京都に戻り、この碑のあるところに再建されました。天正二年（一五八三）、豊臣秀吉の京都改造の際に寺町二条に移転しました（現在は左京区岩倉幡枝町）。妙満寺は『都名所図会』巻一では次のように説明されています。

妙塔山妙満寺  
は京極通二條の南にあり、法華宗

岩上通 佛光寺  
下ル徳屋町 ①



岩上通 佛光寺  
下ル晒屋町 ②



佛光寺通 岩上東入 晒屋町 ③



二枚の町名看板の出現状況

にして、開基は日什上人なり。永徳三年に建立あり。元  
 の地は綾小路堀川の西にあり。今妙満寺町  
えいとく、ねん、こんりふ、めうまんじ、といふ

引用末尾の割書に示されているのと変わらず、妙満寺の名前は、このあたりの町名「妙満寺町」として今も残っています。上記部分図（イ）でもわかるように、東西の綾小路通の両側町です。

京都では、イエズズ会による南蛮寺（三階建ての教会堂）が、天正四年（一五七六）以来、姥柳町（中京区蛸薬師通室町西入姥柳町）にありました。天正十五年（一五八七）の豊臣秀吉による宣教師追放令により破壊されましたが、ポルトガルとの貿易を維持したために、この禁教令も骨抜きになって、イエズズ会による布教が黙認の形で続いていました。フランシスコ会の宣教師ペトロ・バプチスタは、当初はスペイン総督使節として来日し、文禄二年（一五九三）に秀吉からこの碑のある妙満寺跡地を与えられました。遅れて日本への布教をはじめたフランシスコ会は、この地に南蛮寺・病院・修道院・学校を建てて、布教の拠点としました。

慶長元年（一五九六）にスペイン船サン・フェリペ号の遭難・漂着がおこり、船長に対する尋問の報告により、「スペインが宣教師を先鋒に日本を征服する」という疑いをもった秀吉は、一転して、キリシタン追放をおこないました。ペトロ・バプチスタは信者とともに捕らえられ、大阪で捕らえられた宣教師や信者（全部で二十六人）とともに長崎に送られ、処刑されました。のちに、「二十六聖人の殉教」と呼ばれる事件です。

岩上通をもう少し北上したところに、「フランシスコの家」（下



妙満寺跡の碑 二十六聖人発祥之地



フランシスコの家  
 (キリスト教文化資料館)



キリシタン燈籠  
 足下の人形



京区岩上通四条下ル佐竹町）があります。フランシスコ派の大坂修道院の別院ですが、「キリスト教文化資料館」を併設しています。建物の前には、いわゆる「キリシタン燈籠」が建っています。燈籠の下部には、人形ひとがた。これを聖母マリア像に見立てています。ただし、この形の燈籠を「キリシタン燈籠」と言い始めたのは大正時代以降のことで、定説にはなっていないようです。

## ■ 天道神社

ここから少し北上すると、四条通にでます。左折して西へ、和菓子屋若狭屋久茂の前を通り過ぎて、今度は猪熊通を南下することにしましょう。まず、西側に「猪熊通綾小路上ル松本町」④が貼つてあります。三和がスポンサー。



猪熊通 綾小路 上ル松本町 ④

綾小路通との十字路を過ぎてさらに南下すると、天道神社の北隣のお宅に、町名看板「猪熊通佛光寺上ル瀬戸屋町」①が貼つてあります。なお、町名看板の写真の左奥に天道神社の石造の玉垣が写っていますので、位置関係がはっきりします。



猪熊通 佛光寺 上ル瀬戸屋町 ①

猪熊通と仏光寺通の十字路の北西角に、天道神社があります。鳥居は神明鳥居。本殿の右手前には、昭憲皇太后の御胞衣埋納所の石碑が建っています。境内には、下京区区民誇りの木に指定されたオガタマノキ(指定番号A-03)とクスノキ(指定番号A-04)の巨木が立っています。写真でも窺えますが、他の神木とともに町なかの杜もりを作っています。本殿の写真は、別のときに撮ったもの。大きく剪定されています。なお、本殿に向かって左手うしろ側の木がオガタマノキで、右手の手前(胞衣埋納所の石碑の傍ら)がクスノキです。

由緒書には、祭神として、天照皇大神、八幡大神、春日大神の三柱があげられており、

延暦十三年(七九四)桓武天皇が平安遷都されたときに国家安寧子孫長久万民豊穰を祈願して長岡京より当時の三条坊門東洞院(現在の東洞院通御池上る付近)に勧請された。その後たびたびの兵火にあうが天正二年(一

天道神社本殿



本殿横の胞衣埋納所



天道神社



由緒書



天道天満宮（末社）



八坂社・約束稻荷神社（末社）



五七四）織田信長公より五條坊門猪熊の此の地を授かり遷座して今日に至る。

と説明されています。平安京遷都と同じですから、古い神社です。すね。

この神社については、『都名所図会』巻二に次のような説明が載っています。仏光寺通は、五條坊門通と呼ばれています。

天道社 てんだうのじやう 五條坊門猪熊の角にあり。祭る所 まつるところ 日月の神 ひかりづき なり。

『山城名跡巡行志』第一の記載も同様で、次の通りです。

天道社 てんだうのじやう 在同通 なごみち 五條坊門北 きた。鳥居拜殿社 とりいひやうでん 所祭 まつる 日月二神。例祭九月二十一日。

(書き下し文)

天道の社 同通(諸熊) 五條坊門の北に在り。鳥居、拜殿、社は南向。祭る所、日月の二神。例祭九月二十一日。

「祭るところ、日月の二神」とは、由緒書にある現在の祭神と異なっていますね。天照皇大神は太陽の人格神ですからわかるとしても、月の方はどうしたのでしょうか？ 天照皇大神の弟神として月讀つくよみがいるので、天照皇大神を祭れば、自動的に月讀を祭ることになるのかもしれない。あるいは、境内に「天道天満宮」(洛陽二十五社天神の十番、天道天神)があるので、天神がもともとの祭神かもしれない。天神は雷神として見られることが多いのですが、一方で日月を運行させて農業を司る神ですから、これをもって、日月二神といったのかもしれませんが。それにしても、推測に推測を重ねて、やや座りがよくない感じですよ。

天道神社の秋季例大祭(十一月三日)の神幸祭には、町内に守護されている劍鋒が供奉します。天道神社の鋒の全貌が、京都の祭・劍鋒ブログ <http://kenbokko.kyo2.jp/e71833.html> で紹介されています。それはみごとなもの。龍鋒・牡丹鋒(猪熊通仏光寺上ル瀬戸屋町)、桐鋒(仏光寺通猪熊西入・東入晒屋町)、菊鋒・松鋒(猪熊通綾小路上ル松本町)。西田町からは神。この中の龍鋒の意匠をみると、「天道宮」と彫られた額の左右に阿吽の龍が彫られており、左の阿形の龍の頭上に日が、右の吽形の龍の頭上に月が彫られています。これで、日月二神と天道神社との関係が、やや納得できました。

天道神社の社務所らしき建物の仏光寺通に面した壁に、「佛光



佛光寺通 猪熊 西入 西田町 ⑤



佛光寺通 猪熊 西入 西田町 ⑥

寺通猪熊西入西田町」⑤の町名看板。スポンサーは仁丹。天道神社の鳥居の向かいには、同じ町名の看板「仏光寺通猪熊西入西田町」⑥があります。こちらは、アリナミンとありますから、スポンサーは武田薬品。筆者が傍点を追加したように、新字体の「仏」を使っています。また、「下京区」の「区」も新字体になっています。

猪熊通と高辻通の交差点の西南角には、今度は日本語・英語・韓国語・中国語(?)の町名を併記した横書の看板。「高辻通猪熊」⑦の表示だけで、上ル・下ルなどの表記もなく、町名の表



高辻通猪熊 (7)

記もありません。付近の略図が載っているのが丁寧です。スポンサーはライオンズクラブ。昨今はこのタイプの町名看板が増えていきます。

この看板の貼り付けてある一角には、古代友禅苑（下京区高辻通猪熊西入十文字町）があります。一九七六年に設立。友禅美術館での展示のほか、友禅染実演や友禅手作り体験などができます。

## ■ 杉蛭子神社

猪熊通をさらに南下すると、東側に遠藤剛熙美術館（下京区猪熊通高辻下ル高辻猪熊町）があります。古い町並みに忽然とあらわれる洋館が目印です。平成一二年（二〇〇〇）に開設。京都の町並には、時々このように目を見張るような光景が立ちあらわれます。



遠藤剛熙美術館

さらに、南にゆくと、西側に杉蛭子大神宮（下京区猪熊通松原上ル高辻猪熊町）があります。猪熊通に面した門がなくなっていて、以前は門柱に懸かっていた「杉蛭子大神宮」の木札が、社殿の柱に打ち付けてありました。境内には、下京区区民誇りの木に指定された公孫樹（指定番号 A-106）があります。取材時にチェックを忘れていましたので、二〇一〇年三月に京都市建設局に照会したところ、「門はなくなっていますが、公孫樹は健在だ」との返事をえました。後日、確認にゆき（神奈川から京都は遠い）、写真に撮っておきました。



杉蛭子大神宮



公孫樹

『都名所図会』卷二には、

杉恵比寿社 猪熊通松原の北にあり。祭る所蛭子神なり 當社の什物に、親鸞聖人自筆の九字の名號あり。十月二十日にこれを出す。

とあります。九字名号とは、「南無不可思議光如来」のこと。ちなみに、十字名号は、「帰命尽十方無碍光如来」のこと。九字と十字の名号は、浄土真宗では本尊の両側に脇掛としてかけます。また「南無阿弥陀仏」は六字名号。天明の大火をはじめ、幾多の大火で類焼していますので、親鸞聖人自筆の名号も焼けてしまつたと推測されます。

さらに、『山城名跡巡行志』第一では、杉蛭子大神宮の由来として、杉の木が生えた塚があつたためとしています。

杉恵比寿社 在諸熊五條北。門鳥居東。社記不詳。始此所在塚。塚上有杉木。點地立社因名杉夷。例祭十月二十日。

(書き下し文)

杉恵比寿の社 諸熊五條の北に在り。門、鳥居は東向。社記、詳ならず。始め、此の所に、塚在り。塚の上に杉の木有り。地を點め、社を立つ。因て、杉夷と名す。例祭十月二十日。

このように、杉蛭子大神宮は江戸時代から猪熊通松原の北にあることが記されています。所在地の町名は高辻猪熊町で、猪熊通の両側町です。ところが、一筋西の黒門通の両側町として、杉蛭子町があるのです。この町名は、杉蛭子大神宮に由来していることは間違いないので、杉蛭子大神宮が黒門通ではなく猪熊通に面しているのがどうも腑に落ちないと思つていたら、『京町鑑』の新市町通(部分図(ロ)、(ハ))でもわかるように、黒門通をかつてはこう呼んでいた)に面する縦町として、

杉蛭子町 この町に杉蛭子の社有し。今東裏の町に有。此町の南の辻行當、松原通也。(傍点筆者)

と説明されていました。こんなこともあるのですね。

### ■ 五条院の跡

杉蛭子町の北、黒門通に面する両側町は、今大黒町。これは「恵比寿」（蛭子）と「大黒」の対で名付けられたと『坊目誌』に載っています。このあたりの黒門通は古い京都の雰囲気が残っています。このあたりを空地向や駐車場になつて残念。

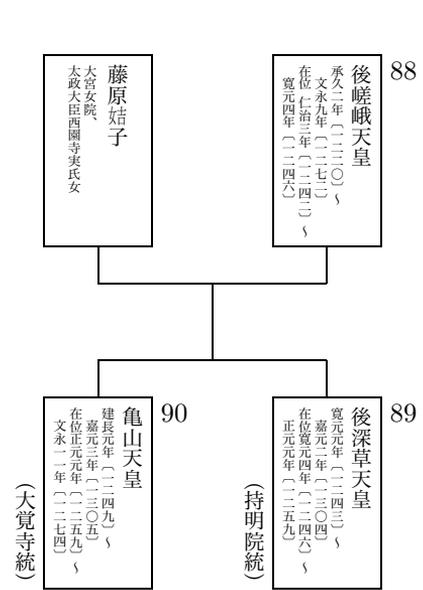
杉蛭子町と今大黒町を含む一帯は、鎌倉時代の後半に、五条院（大宮院、大宮殿、五条殿、五条内裏とも）があつたところです。帝王編年記（成立は一三六四〜一三八〇の間）には、龜山天皇の五条内裏の位置として、「五条ノ北、大宮ノ東、南北二町、東西一町」とありますから、西は大宮通（旧大宮大路）、東は猪熊通（猪熊小路）、北は仏光寺通（旧五条坊門小路）、南は松原通（旧五條大路）に囲まれた、まさにこの地域です。なお、黒門通は、豊臣秀吉の京都改造の折に、大宮通と猪熊通の間の南北に新設された通りです。

この地域が五条院の故地であることは、『山城名勝志』巻之四の「五條院」に説明されていますので、次に引用しましょう。

○五條院拾芥抄云、五条ノ北、大宮ノ東、金岡壘ニ水石、  
百練抄云、康元々々年七月三日辛卯、上皇御移徙五條大宮新造御所一也、東鑑云、大宮 ○又云、正元々々年八月廿六日丁酉、東宮行啓大宮殿、當時 ○帝王編年記云、弘長元年大宮女院御幸五條内裏、五條ノ北、大宮ノ東、南北二町、東西一町、

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年（一七〇五）  
『改定史籍集覽』二二卷、近藤瓶城編、臨川書店、一九八四

新加通記類第一八



五条院は、大宮女院に由来する里内裏です。大宮女院は、後嵯峨上皇の中宮で、後深草天皇と龜山天皇の母。『山城名勝志』の記述の概要を、系図を参照しながら、箇条書にしましょう。

- 1 「金岡水石を疊む」とは、巨勢金岡が造庭に巧みであったことに由来して、水石を巧みに配置した庭の意。
- 2 康元元年（一一五六）（この年の二月に五条院焼失）、新造された五条院に後嵯峨上皇が、移られたこと。移徙は移動の意。移徙と訓読みして、貴人の転居や御輿の渡御を敬つていう語。
- 3 正元元年（一一五九）には、「當時皇居」とありますから、五条院は、後深草天皇の内裏になつていたこと。なお、後深草天皇がそれまで御所としていた閑院は、正元元年（一一五九）五月に焼失しています。
- 4 文中の「東宮」は、のちの龜山天皇で、正元元年（一一五九）

に、即位とともに五条院を内裏としたこと。

5 弘長元年（一二六一）の条に出てくる五条内裏は、龜山天皇の御所。

後深草天皇は、持明院統の祖。龜山天皇は大覚寺統の祖。杉蛭子町や今大黒町が発生するはるか昔のこと、この五条院の地から、両統の確執が始まったといえるわけです。そして、元寇を乗り切ったものの、鎌倉幕府の衰退。後醍醐天皇の建武親政から南北朝時代を経て、室町時代へ時代は転換します。

## ■ 五条院の怪異

五条院は、康元元年（一二五六）に焼失してすぐに新造されたのに、文永七年（一二七〇）にまたもや焼失してしまいました。十五年足らずの間に二度の焼失は、「妖魔の所為にや侍らん」といわれ、当時も奇異なこととして、多くの人々の噂になっていたようです。『五代帝王物語』（成立は鎌倉時代末期）の影印が、インターネットで閲覧できますので、該当の箇所を翻刻してみましよう。

### 五条内裏炎上事

康元元年二月十日官廳焼亡。同廿八日五条殿五条亭炎上。打チツゞキ浅マシカリキ。五条殿ハ大宮院の御所ナルベシトテ常磐井ノ大相国ノ造ラレシカバ、橘知茂ガ沙汰ニテ造リシニ、閑院ノ外、京中ニナキ程ノ御所ニ造立テ御移徙ニ両院御幸アリテ目出カリシニ、程ナク焼タリシヲ、

ナジカハ又造侍ラザラント橘知茂申ケルニヨリテ、又同じキ程ニ造テ、常ニ内裏ニモナリシウエニ、將軍御昇リアラバ、コレガ御所ニナルベシナド沙汰アリテ、障子ニ八年中行事ヲ繪ニカ、レテ、經朝ノ御詞ガキナドシテユ>シキ御所ニテアリシニ、文久七年八月ニ折フシ主上モコノ御所ニワタラセ給シニ又焼ヌ。大カタ大御所ニハ變化ノ事ドモ常ニアリト聞ヘシカバ、ツ井ニ久シカラズ二度ナガラオビタゞシキ焼亡ニテ、タゞ事ナラヌ式ニテアリシハ天魔ノ所為ニヤ侍ルラム。

『五代帝王物語』京都大学付属図書館所蔵 平松文庫

### （現代語訳）

#### 五条内裏炎上の事

康元元年（一二五六）二月十日に官庁が焼亡し、同じく廿八日に五条殿（五条亭）が炎上した。うち続いて予想もしないことがおこってしまった。五条殿は、大宮院（藤原娼子、太政大臣西園寺実氏女）の御所にしようとして、常磐井の大相国（西園寺実氏）が造らせた。家司の橘知茂が造営の任にあたったが、閑院以外では、京中に並びない程立派な御所として建てたものである。引越したときには後嵯峨上皇と大宮院が行幸なさつてめでたかったのに、ほどなく焼けてしまった。橘知茂は、「どうして再建せずにおくものか」と残念がつて、また、以前と同じ規模のものを造営した。通常は内裏になっていたが、鎌倉將軍が昇殿された折には、その御所として使

うようにご命令された。そのため、障子には年中行事の絵を描かせ、能書家の世尊寺経朝に添え書きを書かせるなど、贅を尽くした御所であつた。折にふれて龜山天皇もこの御所に行幸なさつたが、文久七年（一二七〇）八月にまた焼けてしまった。このような壮大な御所には、大抵は怪異のことがつきものと聞いている。栄華は短いとはいっても、二度も焼け落ちてしまうなどということ、は、ただごとではないので、多分、妖魔の所業であろう。

「常磐井ノ大相国」は太政大臣西園寺実氏のこと、大宮院（藤原妹子）の父。橘知茂は、西園寺実氏の家司。「両院」は嵯峨上皇と大宮院。「経朝」は世尊寺経朝のこと、当時の能書家。「主上」は龜山天皇のこと。影印では一行目の割書の左側の字は判然としませんが、ここでは仮に「亭」に当てておきました。「天魔」については、インターネットで公開されている影印からは、第一画が右から左下へはねられているので、「天魔」と読めます。ここでは、これを「妖」の略字だとみなしました。ただし、別の箇所で明らかに「天魔」と読めるところがありますので、確定的ではありません。「五条殿ハ大宮院の御所ナルベシトテ常磐井ノ大相国ノ造ラレシカバ」という記述から、もともと五条院が大宮院（大宮女院）の御所（後深草天皇の里内裏）とする目的で、一二四三年（後深草天皇の生年）頃に建設されたことはつきりします。

『五代帝王物語』の別のところには、文永七年（一二七〇）の記事として、「内裏五條近比アマリニ変化ノ事多クテ」とあり、故

なく大音をたてて屋根瓦が落ちたり、舌音がして虚空に眼ばかりがみえたり、身の丈の高い正装した翁があらわれたなどの怪異が述べられています。

五条院は、文永七年（一二七〇）の焼失のあと、再建された形跡はありません。ちなみに、この時代は外交的に多難で、文永五年（一二六八）に元の外交使節が太宰府に到着。さらに、元寇（蒙古襲来）の文永の役（文永十一年（一二七四））と弘安の役（弘安四年（一二八一））が起こっています。

五条院（五条内裏）の怪異話は、有名であつたらしく、兼好法師（弘安六年（一二八三）？〜観応元年（一三五〇）？）の『徒然草』にもでてきます。

#### 徒然草 第二百三十段

五条内裏には、妖物ありけり。藤大納言殿かたられ侍（り）しは、殿上人ども黒戸にて碁を打ちけるに、御簾を掲げて見るものあり。「誰ぞ」と見向きたれば、狐、人のやうについで、さし覗きたるを、「あれ狐よ」とどよまれて、惑ひにげにけり。未練の狐はけ損じけるにこそ。

『方丈記徒然草』岩波古典文学大系。西尾實校注（一九五七）ただし、旧字体を新字体に変更したところがある。

#### （現代語訳）

#### 徒然草 第二百三十段

五条内裏には、妖物がいたといつて、藤大納言（藤原為世）殿が語られたのは、次のような話である。殿上人

たちが、黒戸くろとで碁碁を打っているときに、簾すだれを掲かげて、見るものがあつた。「誰だれか」と見返ると、狐きつねが人のような態度で覗のぞいているのが見えた。「あれは狐だ」と騒さわぎ立てられて、あわてて逃にげていった。未熟な狐が、化け損しなつたのであろう。

「藤大納言」は藤原為世（建長二年〔一二五〇〕～延元三年・建武五年〔一三三八〕）。二条為世ともいい、二条家を興した為氏（貞応元年〔一二二二〕～弘安九年〔二二八六〕）の子。二条派の歌風を広めました。兼好法師の和歌の師です。五条内裏が焼けたのは文久七年〔一二七〇〕ですから、藤原為世の若いときの思ひ出話を語つたのだと思われまふ。『徒然草』のこの段は、他の段と比較して唐突な感じがしますが、当時の有名人の為世と親しいことをそれとなく示したのかもしれない。あるいは、怪異話を持ち出すことにより、五条内裏を設営した西園寺家に対する当てつけを、それとなく書いたとも考えられます。

### ■ 四条大宮—かつての阪急ターミナル

黒門通をさらに北上すると、綾小路との十字路に三枚の町名看板。スポンサーは三和。町名は、下り松町（黒門通の両側町）と丸屋町（綾小路通の両側町）で、この十字路で、縦町と横町が変則的に隣り合っています。

「下り松町」の町名は、この地に「義経太刀掛の松」があつたことが由来です。『都名所図会』巻二には、次の説明が載つてい



黒門通 綾小路 上あがりさがりまつちよう  
丸屋町 ⑧



黒門通 綾小路 上あがりまるやちよう  
丸屋町 ⑨



綾小路通 黒門 東あがりまるやちよう  
丸屋町 ⑩

ます。

太刀懸松 四條猪熊の西 新町 人家の裏にあ  
り。古 此所は傳教大師の開基し給ふ天台の伽藍なり。  
紫雲山金寶寺と號す。元暦元年の春、源義経 此寺  
に宿し給ひ、熊野の湛僧より授りし太刀を堂前の松に懸  
け給ふより名とす。五十七代の止住道珍僧都、親鸞聖人  
の弟子と成る。堂舎は應仁の兵火に焼亡し、其後寺を西  
六條御堂前に遷して金寶寺と號す。

「新町」は、現在の黒門通のこと。かつては、四條大宮のバス・タクシープールの東、大將軍ビルのあたりに、切り株と熊野権現の小祠があつたらしいのですが、時が経つと町名の由来も次第に定かではなくなつてゆくものです。移転したと推定される金寶寺は、下京区新町通正面下ルに現存（第14回で取りあげた、正面通突き当たりの駒札の立っているところ）。

黒門通はさらに北上しますが、四條大宮のバス・タクシープールに出てきたので、今回は終わりにいたしましょう。この四條大宮街路広場のクスノキは、区民誇りの木（指定番号 A-106）に選ばれています。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（<http://xyntex.com>）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第21回）2010/03/17

2010/11/23 改稿

© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 <http://xyntex.com>